

倫理 第40回「危機の時代の実存哲学～ヤスパース・ハイデッガー・サルトル～」

○今回のポイント

不可思議と矛盾に満ち、何らの意味も目的もないこの世界のなかで、どのように人間は生きるのか。

0. 危機の時代

20世紀前半、ヨーロッパは二度の世界大戦を経験

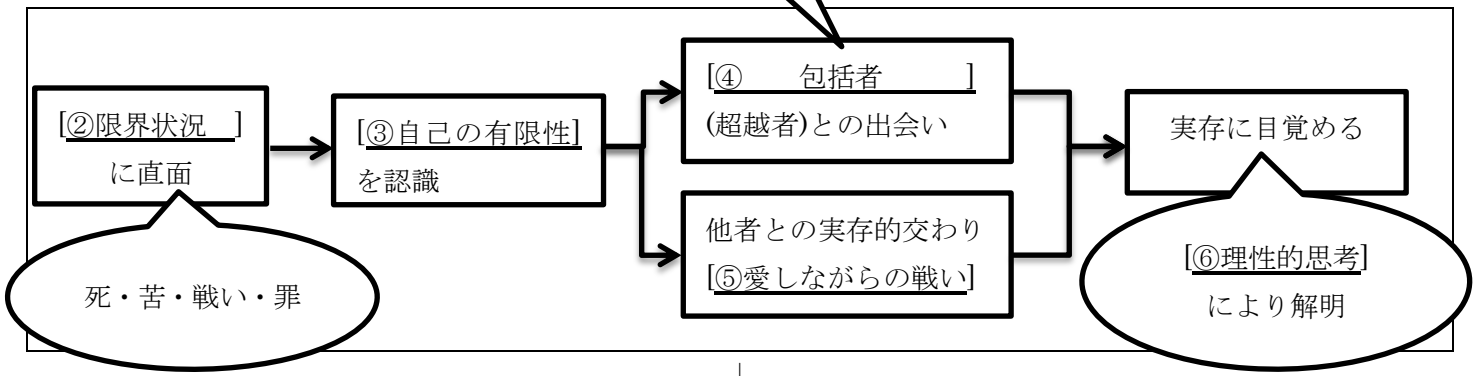


ヨーロッパは経済・文化の最先端地域ではなくなり、西欧の没落を実感させ、精神的にも危機の時代



ヤスパース、ハイデッガー、サルトルの登場

1. 【① ヤスパース】



限界状況に突き当たることで、人は包括者を知ることができるようになる。
 実存は、ともに生きる他者との全人格的な交流(実存的交わり)によって解明される。

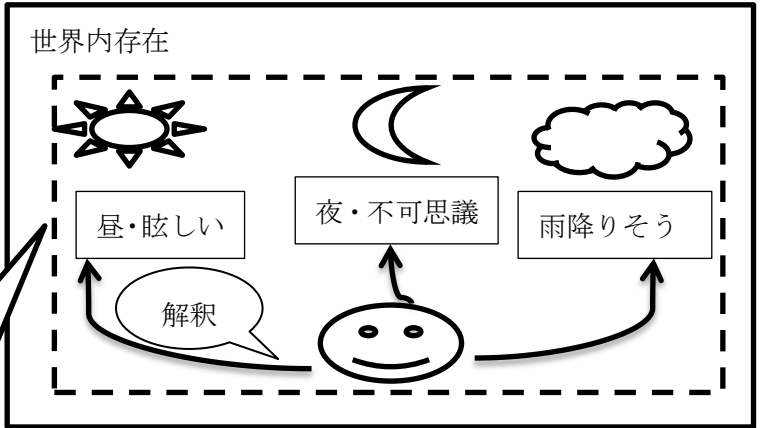
2. 【⑦ ハイデッガー】

(1) 「存在とは何か」…事物や人間が存在するとはどういうことなのか? ←【⑧ フッサール】の現象学の影響



☆【⑨ 現存在】(ターザイン)…「存在するとは何か」ということや「そもそも何かが存在するとはどういうことか」を問うことができる存在

- 事物的存在=モノ
⇒単に存在するだけ
- 現存在=ヒト
⇒存在の意味を問うことができる



【⑩ 世界内存在】とは？
 人間は世界の外部から世界を客観的に眺めることはできない。常に世界の内部から世界を解釈して生きている。現存在は世界の中に投げ出され【⑪ 被投性】世界のうちで世界にかかわる。

(2) 「ダス=マン」への頹落

世界内存在としての人間は、周囲に合わせて行動し、主体性を喪失



没個性的な、誰にもあてはまる既製品のような人間へと頹落した人間=「⑫ ダス・マン」となる



人間は本来的に死へと投げ出されている存在であるが・・・



不安から目を逸らし、逃避や気晴らしのため、日常生活に埋没し、おしゃべりにふけり、好奇心の虜になり、曖昧さに安住している。

人間は「⑬ 死への存在」であることを自覚。「死への先駆的決意」



【⑭ 存在の忘却】

⇒「存在」とは何かなど問わなくなる

【⑮ 故郷の喪失】

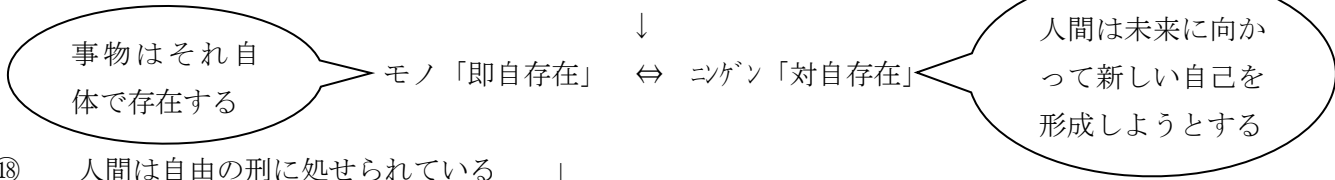
⇒本当の自分とその拠り所を見失って生きる

現存在としての人間は「死への存在」であり、死という有限性を自覚することによって、本来の自己の生き方である実存に達する。

3. 【⑯ サルトル】

(1) 「⑰ 実存は本質に先立つ」…人間はまず存在し、そのあとで自らを作り上げていく。

- ・投企的存在…人間は将来を選ぶ自由をもち、自分自身を作り上げていく存在。



(2) 「⑱ 人間は自由の刑に処せられている」

- ・自己の人生は自己の自由な意志によって決められるが・・・その責任はすべて自分にある。
- ・自由であることは、きわめて厳しく、重荷のように私たちに覆いかぶさってくる。
- ・人間は自由から逃げられないので、不安を乗り越え、自由にとまなう責任を貫く必要性あり

(3)【⑲ アンガージュマン】(社会参加)

我々の日常的な選択が他者関係に影響を与える。



私たちがある生き方を選択することは、自分を選ぶと同時に全人類を選び取ること
全人類という集団に自己を参加させる(アンガージュマン)



自覚して自己の在り方を選択することは、社会や全人類の運命や将来に対して、各自が道徳的責任を持つ。



人間の自由や尊厳の保障のためには、社会的に連帯することが必要！！